

北海道穂別高等学校

課程 全日制
学科 普通科
生徒数 81名

1 事業のねらい

本校には、町が運営する寮があり、全校生徒の1/3は町外から入学してきている。また、地元の生徒も限られた人間関係の中で育っているため、入学後に生徒同士が温かい人間関係を築いていくためには、コミュニケーションや対人関係力の育成が必要である。本プログラムを活用して、生徒の人間関係形成能力およびコミュニケーション力の育成を図り、望ましい集団づくりと社会性の育成に取り組んでいく。

2 取組の経過

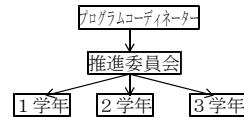
8月
hyperQUテスト結果の分析と実態把握、支援策の検討
コミュニケーションスキル育成教員研修会

10月
構成的グループエンカウターの実施
教員向けエクササイズ研修

11月
構成的グループエンカウターの実施

12月
構成的グループエンカウターの実施
教員向けエクササイズ研修

2月
教員向けエクササイズ研修
＜組織図＞
※ 推進委員会メンバー（教頭、特別支援コーディネーター、養護教諭、教務総合的な学習担当、1学年担任）



3 主な取組の内容

1 構成的グループエンカウター（10月実施）
フリーウォーク、挨拶（アウチでこんにちは）、じゃんけん（負けるが勝ち）、二者択一、パスデイチェイン等のエクササイズを実施した。エクササイズを通して、無邪気に子ども心を出すことで場が和らぎ、またお互いの好みや考え方を伝え合うことで、相互理解が進んだ。人に自分の思いを相手に伝えることで、コミュニケーションスキルの練習に励んだ。



2 構成的グループエンカウター（11月実施）
最初に携帯依存のビデオを視聴して、問題点を確認した。生の対話がしづらい時代であるが「人とうまく関わるコミュニケーション」の大切さについて確認した。その後、あわせじゃんけん、傾聴技法のエクササイズを実施した。最後に、4人1組になり、非言語で画用紙に協力して時計の絵を完成させる取組を行った。傾聴においては、しっかりとしたうなずき、自然な相づちを行うことで話し手も心地よくなり会話が継続することを感じたようである。時計の絵の完成においては、そのグループの人間関係を表す絵になり興味深いものがあった。

2 教員研修会

第1回目（8月）の校内研修会では、①構成的グループエンカウターを実施する上での目的と留意点を確認、②「hyper-QUテスト」結果について分析と支援策の説明、③ 構成的グループエンカウターのエクササイズ研修の3点について研修を行った。

「QUテストの結果でクラスの置かれている状況を科学的視点で理解し、どのような適切な支援をしたらよいかの見通しが持てた」「生徒のコミュニケーションスキルを高めるためには、まず生徒を指導する教職員自身がコミュニケーションスキルを高めることが大切」などの感想が寄せられた。

第2回目（10月）の校内研修会では、生徒向けエクササイズについて分析があり、生徒のコミュニケーション能力が十分でないことが指摘された。「3月末でどのように変容しているか」を期待してステップアップ・プログラムを実施していくことを確認した。

第3回目（11月）の校内研修会では、最初に生徒向けエクササイズの振り返りがあった。

特定の生徒の心理状態やグループの絵を分析して、そのグループの人間関係を読み解き、これからの指導のあり方について助言があった。「頑張っているね」「自分を変えられる」「未来は変えられる」「生きることは選択すること」の4つのキーワードを胸に生徒の心に寄り添っていくことの大切さを再確認した。



第4回目（2月）の校内研修会では、4月の学級開きに向けたエクササイズを研修した。また、2回目のQUテストの分析を行い、2年生に向けて具体的にどのように支援していけば良いかのアドバイスを頂いた。

4 成果と課題

- 成果
調査結果により、人間関係形成力の不足やコミュニケーション力の不足が指摘された。エクササイズを通して、他者との適切なコミュニケーションの取り方の大切さを理解し、人間関係をうまく形成する技法の一端を学んだ。また、教員はLHR・授業において生徒が自分を表現する機会を設け、自己表現力の育成と同時に他者理解を促した。成果として、生徒はお互いに認めあい、学級集団として望ましい関係が形成されつつある。教員は研修を通じて、教員自身のコミュニケーションスキルを高めることが、生徒のスキル育成につながることを確認した。
- 課題
今回の取組は1年生に限定したものととなった。コミュニケーションスキルを高める取組を全校的なものにしていく必要がある。講師から学んだ技法を用いて、他学年でもエンカウターを実施して、生徒のコミュニケーションスキルを高めていくことが重要である
- 次年度に向けて
実施時期を年度当初から取り組んでいくことより一層効果があると考えられる。各学年でのプログラム内容を検討して、コミュニケーションスキルをより一層高めていきたい。また、他校にも研修の案内を出した結果、延べ13人の参加者があった。次年度もこの取組を他校に紹介して取組を還元していく。